

日本聖公会

全国青年大会 2012 in 東北

re : member ~ ひかりを灯そう ~



目次

1	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・	1
	(1) 大会実行委員長挨拶	
	(2) 全国青年大会を「被災地」で行なうことについて	
	(3) 大会概要	
2	基調講演・・・・・・・・・・・・・・・・	17
	講師：川上 直哉牧師 「教会にできることがある」	
3	それぞれの3月11日を振り返って・・・・・・・・	30
4	分かち合い・・・・・・・・・・・・・・・・	33
5	被災地巡礼・・・・・・・・・・・・・・・・	34
	(1) 志津川（南三陸町）コース	
	(2) 石巻コース	
	(3) 新地町コース	
	(4) 荒浜での祈り	
6	教区紹介・・・・・・・・・・・・・・・・	41
7	聖餐式・・・・・・・・・・・・・・・・	43
8	参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・	49
9	会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・	53

実行委員長挨拶

日本聖公会 2012 年全国青年大会をお祈りいただきありがとうございました。

今回の青年大会のテーマは「re:member ～ひかりを灯そう～」でした。

このテーマには絶対に東日本大震災を忘れてほしくないという思いが込められています。

今大会は日本聖公会の東日本大震災被災者支援「いっしょに歩こう！プロジェクト」や超
教派被災者支援グループ「東北ヘルプ」について、福島の実状やフィールドワーク、震災に
ついてのシェアリングなど東日本大震災について多くを聞き、考え、見て、感じたと思いま
す。フィールドワークの最後に全員で集まった仙台市荒浜や最終日の聖餐式では各々の思い
を祈りとしてお捧げできました。

これを機に多くの人の心の中に東日本大震災を刻み、2011 年 3 月 11 日に起こった事を決し
て忘れず、これから普段の生活に戻っていただければ幸いです。

また、今大会の平均年齢は 26 歳でした。これだけ多くの青年達が日本聖公会のプログラ
ムに興味を持っているということは同じ青年として本当に嬉しく思います。青年としてもこ
れからの日本聖公会のチカラになれるよう奉仕したいと強く感じました。

今現在、日本のみならず世界中ではたくさん問題があります。青年大会では「青年」につ
いてわたしたち青年自信で語り合うことができる平和な「新しい世界」をわたしたち青年が
作っていくべきであると感じ、そうなるよう努力したいと思います。

日本聖公会 2012 年青年大会実行委員長 ヨシュア岩本翔太

日本聖公会各教区主教
各教区教会御中
教役者各位

2012年7月15日
日本聖公会青年委員会
委員長 司祭 小林聡

全国青年大会を「被災地」で行なうことについて

主のみ名を賛美いたします。

日頃より青年活動にご理解とご支援を頂き、本当にありがとうございます。特に青年の日の祈祷日を全国の教会、施設で覚えお祈りを頂いておりますこと心より感謝申し上げます。

今年は4年に一度開催してまいりました全国青年大会を8月23日（日）～26日（日）の期間仙台を会場に開催することとなりました。開催地選定に当たりまして、2011年3月11日起こりました東日本大震災によって被災した地域を巡り、また「いっしょに歩こう!プロジェクト」の活動を学び、これからの教会としての関わりや働きについて考えることを目的とし、被災地域の一つである仙台を会場といたしました。青年たち自身が仙台に足を運び、そこで活動している方々、特に青年自身の活動や思いを分かち合うことは、教会の青年に取りましてかけがえのない経験となることと信じております。

青年委員会ではそのような思いをもちつつ、福島にある原子力発電所事故に伴う放射能汚染がまだまだ大きな問題をはらんでいることを認識しております。そのような中であって今回の全国青年大会では共に在ること、共に歩むことを大事にしつつ、仙台を中心にした被災地を回るプログラムを予定しております。放射線の影響に対する懸念の声も頂いておりますが、青年委員会としましては今大会への参加について、参加者自身の思いに委ねたいと考えております。この大会が、青年たちにとっての出会いと、思い巡らし、学びの大切な機会となることを願いつつ、ここに開催への思いを書かせていただきました。

それぞれの教会、施設、現場の中で青年たちの存在が尊いものとしてこれからもあり続けますようにお祈りしております。みなさまのお働きの上に主の祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。

日本聖公会
全国青年大会
2012

re:member

～ひかりを灯そう～

わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。
(マタイ 28:20)



2011年3月11日東日本大震災により東北地方を中心とする広い地域で甚大な被害を受けました。多くの方が神様の存在さえ疑う大きな被害であり、一年以上経ったいまもなお苦しい生活を強いられている人が大勢います。ことに、津波で被災された方、地震による被害にあわれた方、原発事故により放射線量が多い地域で暮らしている方など様々です。しかし、このような状況でも被災者の方々は必死に毎日を生きておられます。

今回の青年大会のテーマは『re:member ～ひかりを灯そう～』です。東日本大震災はまだ終わっていません。そこで、大震災を風化させないためにも”覚え続ける”という意味で remember と名付けました。また、この被災地で「もう一度 (re) 聖公会の青年達 (member) が集まり、皆で一つのひかりを灯そう」という想いも込められています。同じ神様を信じる青年達が被災地で多くのものを見て感じ、話し合い、分かち合いたいと思います。

神様のお導きにより全国から東北の地へ青年が集まり、被災地のみなさんの想いととも希望のひかりを灯しましょう。

全国青年大会実行委員長 岩本翔太

-
- 日程 : 2012年8月23日(木)～8月26日(日)
会場 : 宮城県各所
宿泊 : 秋保グランドホテル
〒982-0241 宮城県仙台市太白区秋保町湯元枇杷原 12-2
TEL 022-397-3131 web <http://www.akiugrand.com/>
企画・運営 : 日本聖公会全国青年大会 2012 実行委員会
協力 : いっしょに歩こう！プロジェクト
主催 : 日本聖公会青年委員会

スタッフ

実行委員長 : 岩本翔太
副実行委員長 : 赤坂聖矢、赤坂唯
会計 : 影山敬信、司祭 矢萩新一
書記 : 関澤美育、林嘉奈子
広報 : 赤坂恵矢、林裕登、松村希
チャプレン : 司祭 越山哲也
青年委員 : 司祭 小林聡、池住圭、執事 千松清美、司祭 野村潔、
早川成、司祭 林和広、

◆プログラム担当

全体進行 : 赤坂聖矢、赤坂唯
タイムキーパー : 松村希
礼拝 : 司祭 越山哲也、林嘉奈子
懇親会 : 影山敬信、松村希
セッションⅠ／基調講演 : 岩本翔太
セッションⅡ／
それぞれの3月11日を振り返って : 岩本翔太、司祭 矢萩新一
セッションⅢ／原発に関する学び : 岩本翔太
セッションⅣ／分かち合い : 赤坂唯
被災地巡り
志津川コース : 松村希
石巻コース : 岩本翔太
新地コース : 赤坂唯
セッションⅤ／分かち合い : 赤坂聖矢

プログラム

◆ 8月23日（木）

15:00	集合・受付	ロビー
16:00	開会セレモニー 開会礼拝、オリエンテーション	大広間
17:30	夕食	食堂
19:00	ガイダンス 「いっしょに歩こう！プロジェクト」について プロジェクト副本部長 池住圭さん	大広間
19:50	セッションⅠ 基調講演 「教会にできることがある」 ※資料別紙 講師：川上直哉牧師	大広間
21:30	就寝前の祈り	大広間

◆ 8月24日（金）

07：30	朝の祈り	大広間
08：00	朝食	食堂
09：30	セッションⅡ「それぞれの3月11日を振り返って」	大広間
12：00	昼食	食堂
13：30	セッションⅢ「原発に関する学び」 講師：越山健蔵司祭	大広間
15：00	自由時間	
15：30	セッションⅣ「分かち合い」 *グループに分かれてセッションⅠ～Ⅲを通して感じた事を共有する時間です。 *グループ分けはしおりの参加者名簿（P 4～7）でご確認ください。	大広間、 客室
17：30	夕の祈り	大広間
18：00	夕食	食堂
19：30	懇親会 *教区ごとに5分程度で教区の紹介をしていただきます。 *教区以外にも、なにかアピールしたい事がある方は実行委員までお知らせください！	大広間
21：30	就寝前の祈り	大広間

- *客室のうち数部屋をセッションⅣ「分かち合い」の会場として使用させていただきます。会場となる部屋の方はご協力をお願いします。
- *セッションⅣ「分かち合い」後に、25日の被災地巡りのコース希望をお聞きします。コース分けは懇親会後にお知らせいたします。

◆ 8月25日（土）

07：00	朝食 *コースごとに出発時間が違います。各自、スケジュールに合わせて朝食をとってください。 *被災地巡りのグループ分けは大広間に掲示します。ご確認ください。	食堂
08：00	被災地巡り 志津川コース出発	
08：30	被災地巡り 石巻コース出発	
09：00	被災地巡り 新地コース出発	
	*被災地巡りの際、しおりをご持参の上、暑さ対策をしてください。（タオル、水分、帽子など） *コースごとに被災地を巡った後、仙台市の荒浜地区に集合して全員でお祈りを捧げましょう。	
17：30	秋保グランドホテル到着	
18：00	夕食	食堂
19：30	セッションV「分かち合い」 *グループに分かれて被災地巡りを通して感じた事を共有する時間です。 *グループ分けはしおりの参加者名簿（P 4～7）をご確認ください。	客室
21：30	就寝前の祈り *分かち合いのグループごとに行います。大広間には集まりません。	客室

*客室のうち数部屋をセッションV「分かち合い」の会場として使用させていただきます。会場となる部屋の方はご協力をお願いします。

◆ 8月26日（日）

	<p>朝食</p> <p>* 7:00～9:00まで、一階食堂にて朝食が食べられます。 各自、本日のスケジュールに合わせて食堂へどうぞ！</p>	食堂
09:30	<p>聖餐式</p> <p>*各自荷物を全て持って、会場へ集まってください。</p>	大広間
11:00	<p>閉会セレモニー</p>	大広間
11:30	<p>解散</p> <p>*秋保グランドホテルから仙台行きシャトルバスが2台出ます。忘れ物、乗り遅れにご注意ください！</p> <p>12:00 秋保グランドホテル発</p> <p>12:40 仙台駅着</p>	

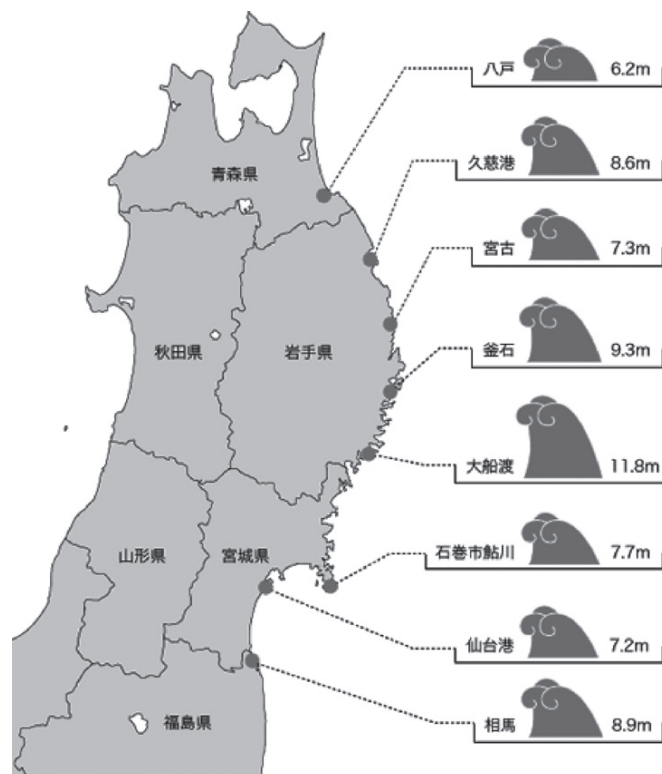
東日本大震災について

2011年3月11日14時46分、三陸沖最大震度7マグニチュード9.0を記録した地震を起因とする東日本大震災によって、日本は太平洋沿岸部を中心に多大な被害を受け、死者、行方不明者は合計1万9272人に上りました。震災直後は宮城、茨城、福島、千葉など多くの地域で電気、水道、ガスが停まり、ライフラインが復旧しない中で命を落とされた方もいます。海岸で9.3m以上(注)の高さにも及んだ津波の被害を受けた宮城、岩手、福島を中心に建物の被害も大きく、全国の住家被害は全壊129,198棟、半壊254,238棟。公共建物は35,465棟が被害を受けました。また、津波は海岸沿いの石油コンビナートを襲い、地震と津波によって宮城県内だけで135件の火災が発生しました(※以上出典1)。

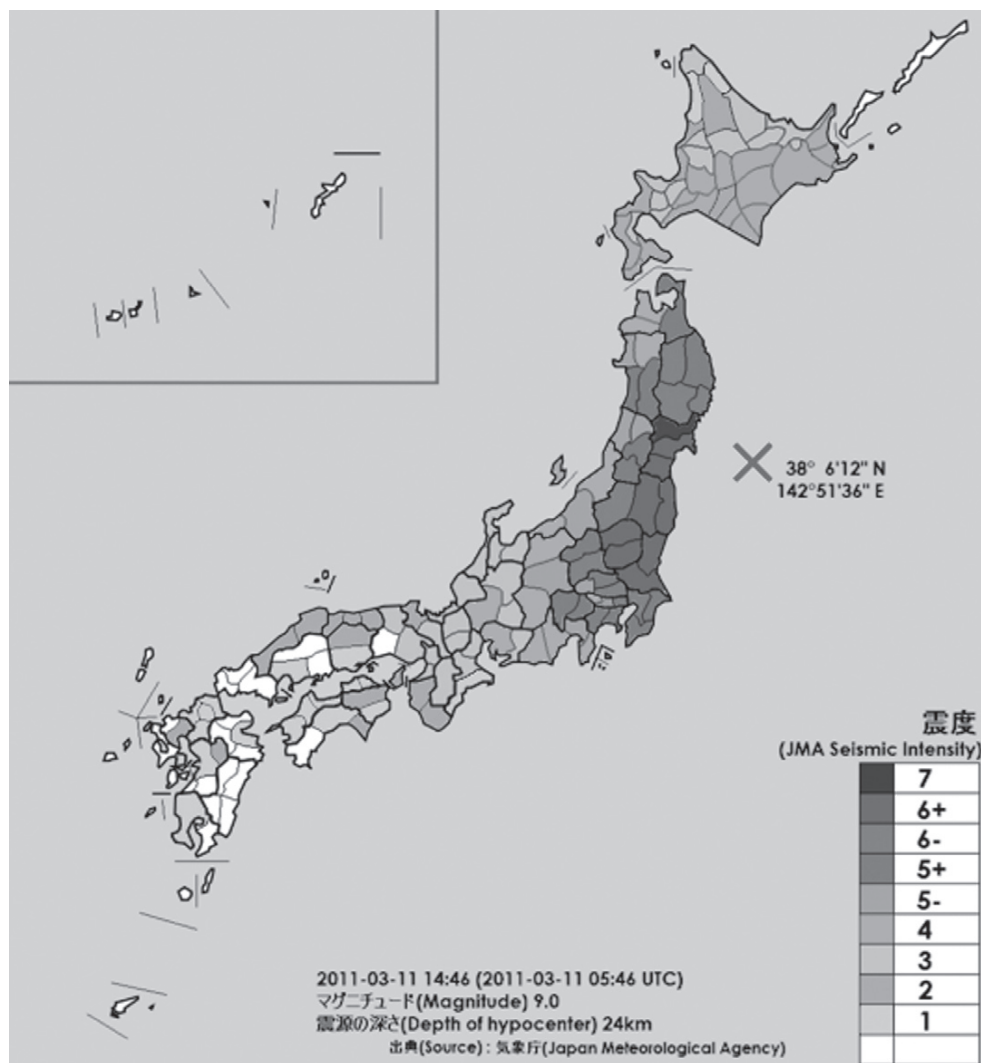
被災者の中で震災により仕事を失った方が推定12万人、自営業の方に関してはまだ把握できていないため、さらに増え20万人にのぼるのではないとも言われています(※出典2)。

◆ 津波の高さ

2011年4月5日気象庁発表データより



◆ 震度



※出典 1…2012 年 3 月 11 日 発表。総務省消防庁災害対策本部『平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)について(第 145 報)』

(注) 観測施設が津波により被害を受けたためデータを入手できない期間があり、それ以上の後続の波が来た可能性もある。

※出典 2…2012 年 6 月 現在。NHK 調べ。

プロジェクトの歩みと全国青年大会

日本聖公会では、大震災発生直後、管区事務所に「東日本大震災日本聖公会対策本部」を設置し、全国に緊急支援、緊急募金を呼びかけました。また、ほぼ時を同じくして設置された「東北教区災害対策本部」との連携により、全国から集められた支援物資を教会、信徒、関連施設、避難所などに配布しました。4月になると、少しずつではありますがインフラや物流が回復し始めたと判断し、4月末をもって物資の集積と東北教区への搬入を終了しました。

支援活動も次の段階に入り、地震や津波被害の甚大さ、東京電力福島第一原発の爆発による被害の深刻さ、長期にわたると予想される復興への道のり、また、国内外から寄せられたお祈りと支援を考え、日本聖公会全体としての取り組みが緊急かつ必要との認識が共有されました。そして4月中旬には「日本聖公会東日本大震災被災者支援復興本部運営委員会(仮称)」が立ち上げられ、仙台オフィスの開設や今後の活動体制、活動内容について検討されました。名称も「日本聖公会東日本大震災・いっしょに歩こう！プロジェクト」と定められ、5月6日の仙台基督教会で行われた聖餐式をもって仙台オフィスが開設されました。そして、全国から選出・派遣されたスタッフやボランティアを中心に本格的な支援活動が開始されました。

以来、釜石被災者支援センター、小名浜聖テモテ・ボランティアセンター、被災者支援センター・しんち、福島(仮称)ベースが順次立ち上げられ、各地に沿った支援活動が展開されています。また、気仙沼市や仙台市での障がい者通所施設支援や大船渡市、気仙沼市、石巻市、仙台市、福島市などでは、外国人被災者支援活動も行われています。

2008年に次ぐ「全国青年大会2012」をこの被災地で、との思いから、今年4月11日に「全国青年大会実行委員会」が立ち上げられ、「remember～ひかりを灯そう～」のテーマのもと、実行委員を中心に「いっしょに歩こう！プロジェクト」をはじめ、多くの人の協力を得ながらその準備を重ねて来ました。

被災地巡りについて

25日は3コースに分かれて被災地を巡ります。それぞれの地域を訪れた後、会場と同じ仙台市である若林区荒浜に全員で集まります。みなさんの思いをひとつにして被災地や被災者、復興に携わる人全員のためにお祈りを捧げたいと思います。



→ 志津川 →
秋保グランドホテル → 石巻 → 荒浜 → 秋保グランドホテル
→ 新地 →

* 2日目の分かち合い後にコースの希望を聞き、コース分けをします。

被災地巡り | 志津川コース (宮城県)

◎南三陸町志津川とは

志津川湾ではギンザケ、カキ、ワカメなどの海面養殖業が盛んに行われ、近年では農漁業体験を含む滞在・体験型の観光にも力を入れていた。東日本大震災時は最大震度6弱を観測。地震に伴う津波が直撃し、町役場も流され、職員の多くが犠牲になった。町の防災対策庁舎では当時24歳の女性職員が津波到達の直前まで「6mの津波が来ます。早く高台に避難してください」と防災無線で呼び掛け続け、自らは津波にのみ込まれて行方不明に。4月23日に遺体が発見された。町人口の約半数にあたる人数が一時、避難生活をしていた。

人口（震災前）	17,666人
人口（震災後）	15,337人
死者	610人
行方不明者	244人
家屋全壊	3,142棟
半壊	173棟
仮設住宅	58地区 (2,195戸)

※南三陸町全体のデータ
2012年7月現在



◎ガイド 齋藤孝司さん

◎スタッフ 松村希

被災地巡り | 石巻コース (宮城県)

◎石巻市とは

仙台市に次ぐ宮城県第二の都市であり全国でも有数の水産都市。市内の万石浦でカキの養殖法が開発され、世界中に広がった。

東日本大震災では最大震度6強、津波により市街地が水没。港のタンクから漏出した石油に引火したと見られる大規模な火災も発生。石巻市の人口の2.4%が死亡または行方不明に。石巻市立大川小学校では全校児童108人のうち74人、教職員13人のうち10人が死亡または行方不明。

人口 (震災前)	162,822 人
人口 (震災後)	151,879 人
死者	3,445 人
行方不明者	493 人
家屋全壊	22,357 棟
半壊	11,021 棟
仮設住宅	131 地区 (7,298 戸)

※ 2012年7月現在



◎ガイド 遠藤諒子さん 佐藤文敬さん (ルーテル救援「となりびと」スタッフ)

◎スタッフ 岩本翔太

被災地巡り | 新地コース (福島県)

◎新地町とは

宮城県と福島県の県境にある海沿いの街。主要漁港である釣師浜漁港には、親潮と黒潮がぶつかる潮目の好漁場から、カレイなどが水揚げされる。駅から海までは数百m、市街地は駅よりも海に近い位置にあった。震災当日は震度6強を観測、釣師浜地区を約16mの津波が襲った。新地町町内の火力発電所で一時1,000人取り残された。町内8カ所の仮設住宅には町外から避難した166世帯の原発被災者が生活している。

人口 (震災前)	8,387 人
人口 (震災後)	8,005 人
死者	116 人
行方不明者	0 人
家屋全壊	439 棟
半壊	138 棟
仮設住宅	8 地区 (573 戸)

※ 2012年7月現在



◎ガイド 三宅新一さん 中曾渉さん (共に、磯山聖ヨハネ教会信徒)

◎スタッフ 赤坂唯

被災地巡り | 荒浜（宮城県）

◎仙台市若林区とは

荒浜地区を含む仙台市若林区は、2011年3月11日に震度6弱を観測。仙台港の津波の高さは7.2m（推定値）。その後の最大余震（4月7日23時32分頃 マグニチュード7.1 震源：宮城県沖）でも震度6弱を観測した。震災当夜には溺死と見られる遺体200～300人が同区で発見されたことが報道で大きく取り上げられ、2012年3月6日までに若林区では338名の遺体が発見された。津波により浸水した面積は、区全域の56%に上った。

人口（震災前）	1,046,654人
人口（震災後）	1,058,412人
死者	863人
行方不明者	31人
家屋全壊	29,817棟
半壊	107,843棟
仮設住宅	19地区 (1,523戸)

※仙台市全体のデータ
2012年7月現在



Session I

基調講演とし、東北ヘルプの川上直哉牧師をお招きし、「東北ヘルプ」として、どのように1年半活動してきたかの報告と、今キリスト者として大切にすべき事を公演していただいた。

「ひかり」ではなく「あかり」を灯すことが大事だとお話しされた。

講師：川上直哉先生

【略歴】

1973年 北海道に牧師の息子として生まれる

1992年 立教大学文学部キリスト教学科入学、神学博士。

1998年 約5年間、東京基督教大学 寮務課寮務係として奉職。

現在 東北学院大学, 仙台白百合女子大学, 尚絅学院大学非常勤講師

日本基督教団仙台市民教会主任担任教師

仙台キリスト教連合 被災者支援ネットワーク(東北ヘルプ)事務局長

他

日本聖公会東北教区仙台聖フランシス教会、仙台基督教会も加盟する超教派団体「仙台キリスト教連合」が、東日本大震災を受け被災者支援として「東北ヘルプ」を設立した。「東北ヘルプ」は仙台キリスト教連合関連の連携を促進することを任務とし、「日本聖公会 いっしょに歩こう！プロジェクト」とも、様々な活動において協同し活動を展開している。

「教会にできることがある」

仙台キリスト教連合 被災支援ネットワーク

日本基督教団仙台市民教会

川上直哉

目次

序論：被災地で気づいた二つのこと：第一戒と大宣教命令 / 「日本人」と「日本のキリスト教」

- ・「他の神ではなく」＝他の神の存在を前提として
- ・イエスの弟子を育てるべきこと／教会員数を求められていないこと。
- ・「身内」「客」「他人」の世界＝「客」としての役割の価値
- ・イエスの弟子を作り上げてきた歴史／受洗者を生み出せなかった歴史・・・全否定か、改良か？

1. 方法論的問題

- (1) 目標としての「現場の神学」(資料1)
- (2) 方法論としての「神学=theologia」(資料2)
- (3) 「ケア (care←caru)」という語

2. 「教会にできることがある」

- (1) 「仙台キリスト教連合の歴史」(資料3)
- (2) 支援のモデル (資料4)
- (3) 支援の原則 (資料5)

3. 「グランドハウス・プロジェクト」概説

- (1) 経緯と主旨 (資料6)
- (2) プロジェクト・サイクル
 - (1) 仮設住宅内事務所と本部事務所の二つの極によって情報を収集・整理する。
 - (2) 収集した情報に基づいて長期的な支援プログラムを構築する。
 - (3) プログラムに基づき資金申請を行い、プロジェクトを実行する。
 - (4) プロジェクトの進捗状況に基づき、新たな支援プログラムを構築する。
 - (5) 上記(3)へ戻る。
- (3) 4年計画 (資料7)

結論：「祈りによらなければ」

資料1：「現場」から始め、「現場」へ戻るために（電話相談の事例から）

相談者は、仙台市在住の女性。2011年3月11日、20代前半の息子を津波で亡くす。夫と息子・娘と共に生き残る。その後、義父が癌になり死亡。その他、震災後に親しい人を5人亡くす。

2012年3月以降、生きる力が湧かなくなったことが主訴。傾聴に努めると、なぜ、このような目に遭うのかと、意味を問われる。

川上は、ご息様の弔いの状況を訊ねた。家の宗教は曹洞宗であるが、ボランティアの僧侶に弔いを依頼し、位牌も作成したとのこと。川上は祈りにおける位牌の機能を説明し、位牌を作ったことの価値を確認して「よかった」と語る。また、息子は死んだ際、苦しんだはずなので、その息子に自分たちを守ってくれとは祈れないと相談者が語る。そこで川上は、苦しんで死んだとは限らないこと、少なくともキリスト教では死後は平安に過ごしているはずであること、したがって、ご息様に守って欲しいと祈ることは間違いとは言えないことを語る。

また川上は、「落ちている」時に「上がろう」とすると、相対的に落下速度が増す、ということ語り、むしろ「落ちている」時は自分の中にある力を信じてひたすら待つ方が安全であることを語る。

90分ほどの会話の結果、少し気分が楽になったとの相談者の言葉を以て電話は終了した。川上はまたかけることを促し、電話を切った。

資料2：「神学」という学問

神学は私の見るところ、久しくただ存在の前提せられた神がいかにあるかという事実を記述する情報の学にとまり、判断、解釈、論証の領域には及んでいなかったのではないか。¹

神の啓示をはじめとして、キリストの言葉、使徒の文書、それら残されている様々の断片的な所与としての情報を、何らかの問題位相に即して、原理的に構成する、という宗教的情報の体系化としての神学…そのような情報整理学ならば、むしろコンピューターの操作で可能なものであり、何も優れた知性を恵まれた神学者たちが、その知性をもって行うまでもないことではなかろうか。²

…神は顕現としての存在に尽きるわけではないから、そこで、世界と人間の認識から理解されるのではない神自身の文脈、聖書に啓示される限りの神を純粹に取り出す手続きが重要になってくる。四世紀の教父たちは、それを、神の世界に面する側面を言うオイコノミアに対して、狭い意味でのセオロギア（神学）と呼んだ。その内容が三位一体である。³

¹ 今道友信「神の存在証明について」『日本の神学』12号（日本基督教学会、1973年）39頁。

² 前掲書、33～34頁。

³ 山村敬「三位一体のドグマの成立と展開」『富山大学人文学部紀要』5号21頁。theologia という語が mythologia という語への対応として、2世紀のアレクサンドリアのクレメンスによる『ストロマータ』に初出する、ということについては、Wolfhart Pannenberg, *Theology and the Philosophy of Science*, translated by Francis McDonagh, London: Darton, Longman & Todd, 1976, pp. 7-8.

資料3：仙台キリスト教連合の歴史

- (1) 仙台キリスト教連合は、超教派による祈りと礼拝の集いを行う中で生まれた。
- (2) 日本基督教団東北教区仙塩地区牧師会を核として始まった。
- (3) 上記核に、NCC加盟教団・JEA加盟教団・カトリック仙台市教区・その他教団・単立の各教会が参加して、現在の形となる。
- (4) 1989年の大嘗祭をめぐり、活動は活発化する。
- (5) NCCとの協力の中で、世界的な活動を担ってきた。
- (6) その上で、自らの存在を「祈りのための集い」と規定し、「必要に応じて」諸活動を担うものとした。
- (7) 震災を受けて、2011年3月18日、「被災支援ネットワーク」を立ち上げた。
- (8) 6月、「必要に応じて」NCCとの協力の中で「グランドハウス・プロジェクト」を開始した。

仙台キリスト教連合 年表 (抜粋)

- 1964年 各教派連合の「市民クリスマス」開催。
- 1973年 「元旦礼拝」と「8月15日平和のための早天祈祷会」を、勾当台公園やレジャーセンターで開催。
- 1980年代 日本基督教団東北教区仙塩地区牧師会（世話役：ホサナ教会牧師・河本隆夫／1982年より仙台北教会牧師・菅隆志）に日本聖公会・ルーテル各派・バプテスト各派・カトリックからの聖職者が参加し、「新年合同礼拝」「新年一致祈祷会」「8月15日の平和を求めるキリスト者合同祈祷会」を開催し続ける。
- 1988年 7月7日、牧師会の代表であった日本基督教団仙台北教会牧師 菅隆志の召天に伴い、カトリック仙台元寺小路教会で連合委員会開催。代表として、日本福音ルーテル鶴ヶ谷教区教会牧師 杉山昭男を選出。会計として、カトリック仙台元寺小路教会員 土井省吾を選出。「仙台市の超教派の教会の連絡」と「共催でした方が良いとする様々の行事」のために「毎年4～5回の委員会を中心に実施する」こととなる。
- 12月11日、昭和天皇病床下での声明書を出す。
- 1989年 5月11日、NCC Jと共に「アジア祈祷日仙台」として、日本基督教団仙台ホサナ教会にてフィリピンのノエル・リラルバ氏の講演会開催。
- 7月1日、仙台キリスト教諸教会住所録を作成
- 10月19日～22日、エルパーク仙台にて、日本聖書協会と共に「仙台聖書展」を開催。1389名の参加者を得、約150万円の催事となった。
- 1990年 4月7～8日、NCC東ドイツと共に東ドイツ教会代表 Mr. Maunfred Preusse/ Mrs. Gabriele Jenge の講演会を、日本基督教団仙台ホサナ教会にて開催。
- 5月7～13日、旭ヶ丘青年文化センターで開催された「心に刻むアウシュヴィッツ展」に協力。
- 6月10～24日、キリスト受難劇鑑賞とエジプト・イスラエル聖地観光旅行を実施。
- 8月12日、「大嘗祭に公的性格を持たせ、公金を使用することに反対する声明文」を発表。
- 9月14～15日、日基教団青葉荘教会で開催された「朝禱会仙台ブロック大会」に協力。
- 10月4～6日、NCC Jと共に仙台茂庭荘を中心に開催された「第七回日韓キリスト教協議会」に協力。
- このころから、「2・11信教、思想、報道の自由を守る宮城県民集会」に協力する。
- 11月18日、旭ヶ丘市民センターで開催された「大嘗祭への公金支出に反対する宮城キリスト者の会」の集会に協力。

1991年 6月11日、仙台キリスト教連合・核兵器廃絶と平和を願うキリスト者の会・カトリック正義と平和仙台協議会の三者主催で開催してきた「8・15平和祈禱日」集会を、他の二者を含めた仙台キリスト教連合主催として開催することとする。また、連合委員会委員選出について、2教会以上の教派は教派ごとに委員を選出、1教会の教派は参加意志のある方に、またYMCAやYWCAなど各キリスト教関係団体代表者にも入っていただき、大きな連合体とする。ただし、参加の是非は全く自由。

12月25日、イズミティ21で福音派教会各派が中心になって開催された「世の光・市民クリスマス」に協力（1994年まで継続）。

1992年 「朝禱会」「実践神学読書会」「バルトを読む会」「英語礼拝」「仙台YMCA国際青年クリスマス」「靖国問題懇談会」等、参加者それぞれの活動に協力する。

1993年 6月7日、委員会への出席数が減少。委員選出と委員会の持ち方についての議論が始まる。また、外部より依頼のあった催事の開催を見送る。

11月16日、代表の任期を2年、二期4年までと定め、交代は3月に決定することとした。委員会の名称を「世話人会」と定めた。その構成メンバーは以下の通りとした。

- カトリック教会より3名
- 日本基督教団より2名
- 日本聖公会より1名
- 日本福音ルーテル教団より1名
- 日本ルーテル同朋教団より1名
- 日本基督改革派教会より1名
- 日本バプテスト連盟より1名
- 日本バプテスト同盟より1名
- 日本基督教会より1名
- 日本イエスキリスト教会より1名
- 救世軍より1名
- 在日大韓基督教会より1名
- 保守バプテスト同盟より1名
- フリー・メソジストより1名
- ハリストス正教会より1名
- 仙台YMCAより1名
- 仙台YWCAより1名
- 仙台YBU文化センターより1名
- 実践神学研究会より1名
- 仙台朝禱会より1名
- 核兵器廃絶キリスト者の会より1名

1994年 3月15日、代表を日本基督教会 仙台黒松教会牧師 上山修平に交代した。会計担当者は継続とした。また、フリーメソジスト教会より連合脱退の申し出があった。

11月28日、NCCより「中国・愛徳基金会総幹事を迎えての集会」開催依頼がある。12月に緊急の会議招集を呼びかけ、1995年2月に開催。

1995年 3月17日、代表に上山修平が再任、会計に仙台朝禱会 斉藤潔が選出。

1996年 11月5日、「世界食糧デー仙台大会」へ、毎年5万円を献金することを決定。世話人を26名と確認。

1997年 6月、「エホバの証人について考える会」を開催。

「8・15平和を求める合同祈禱集会」の献金を、NCCを通して北朝鮮基金のために奉げる。
 9月4日、「8・15平和を求める合同祈禱会」での講演内容について、穏当に過ぎるとの批判があり、講師による再反論の文書「現代のアレオパゴス」が発表され、「私は、現在のまま、すなわち、教会一致を第一の目的とすること、そして祈りを中心として、必要ならば一致のための研修もしくは対話集会のようなものをする」とよい。そして実際行動の面では、必要に応じて後援または協力をするのは良いが、それは各自の信仰と自主的判断に任す、ということによいではなからうか」という提言がなされる。

9月12日、「仙台キリスト教連合」の性格付けについて以下の通り確認する。

1. この会は、「キリスト教諸教会・諸団体の有志によって集い、世話人会で検討・承認された内容の集会を行う有志団体」とする。
2. 共同の教会として最大公約数的な集まりとし、厳格な規定を設けない。
3. 集会について、基本的には「新年礼拝」「新年一致祈禱会」「8・15平和を求める合同祈禱会」の三つとする。

(「8・15平和を求める合同祈禱会」の性格については、この後審議し続けることとなる。)

11月8日、財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金より、「レーナ・マリアコンサート」への後援依頼を受諾する。

2004年 3月9日、「8・15平和を求める合同祈禱会」のあり方について、従前の講演会形式を止め、礼拝と分団協議の二部構成とすることを決定。第一部に戦争体験者の証言を入れることにした。結果、155名出席(過去最多)。以後、同様の出席者となる。

6月22日、世話人として、日本同盟基督教団仙台のぞみ教会牧師 秋山善久と日本基督教団仙台青葉荘教会牧師 島隆三が加わる。また、「8・15平和を求める合同祈禱会」のチラシ発送を日本YMCAに依頼することとした。

2007年 2月20日、新代表として日本キリスト改革派仙台教会牧師 吉田隆を選任。補佐に日本バプテスト連盟仙台基督教会牧師 山下誠也を選任。会計は引き続き斉藤潔とし、補佐として日本同盟基督教団牧師 秋山善久が選任された。

2011年 3月11日、東日本大震災発生。世話人のラシャペル神父召天。15日の同神父通夜式に集まった世話人で、被災教会への対応を協議するために18日に再度集まることにした。18日、世話人のみならず集まった40名程の諸教会・諸団体代表者によって「仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク(東北ヘルプ)」を設立。

2011年 4月 「社団法人 仙台仏教会」との連携によって「吊いプロジェクト」始動。「宮城県宗教学者連絡協議会」の下に「心の相談室」となり、理事を東北ヘルプより送る。

5月 医療者・学者・宗教者による団体として「心の相談室」は独立し、宮城県宗教学者連絡協議会と「世界宗教者平和会議日本委員会」はその後援団体となる。心の相談室は「Café de Monk(出張傾聴喫茶)」と「電話相談」と「ラジオ放送」を行い、現在に至る。

6月 韓国で開催された国際会議の要請を請けて、NCC・JEDRO と共に、現地事務局「財団法人東北ディアコニア」を設立。被災地の教会による支援活動の現地センターとしての任務にあたる。

9月 「外国人登録法問題に取りくむ全国キリスト者連絡協議会」と「NPO 法人笑顔のお手伝い」と共に、「外国人被災者支援プロジェクト」始動。

12月 「仙台食品放射能計測所」開設。

2012年 4月 「外国人被災者支援センター」設立。

5月 「いわき食品放射能計測所」開設。

資料4：支援のモデル

図1 仙台キリスト教連合のエキュメニカルネットワークと「宗教者にできる支援」

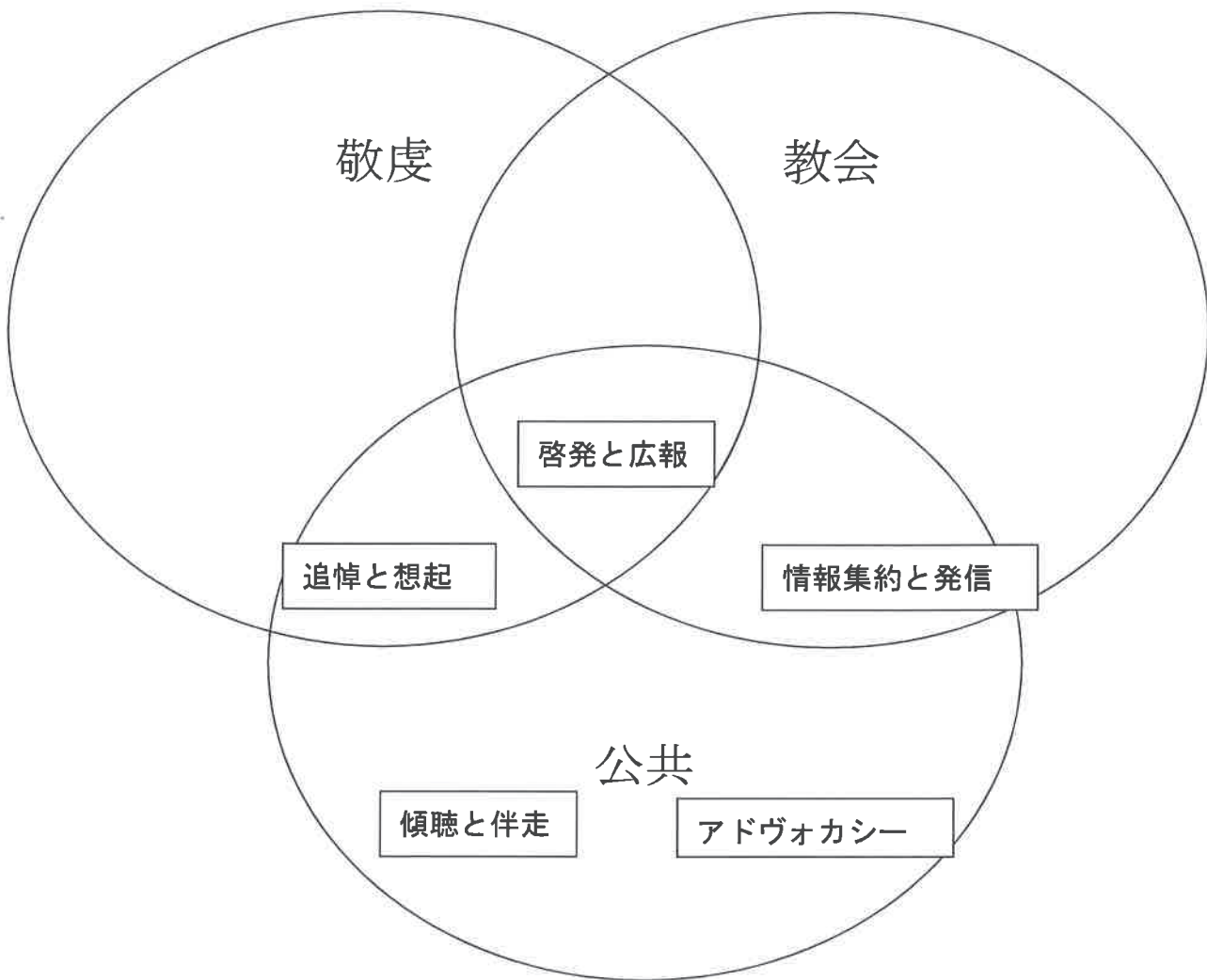


図2 東北ヘルプの支援内容

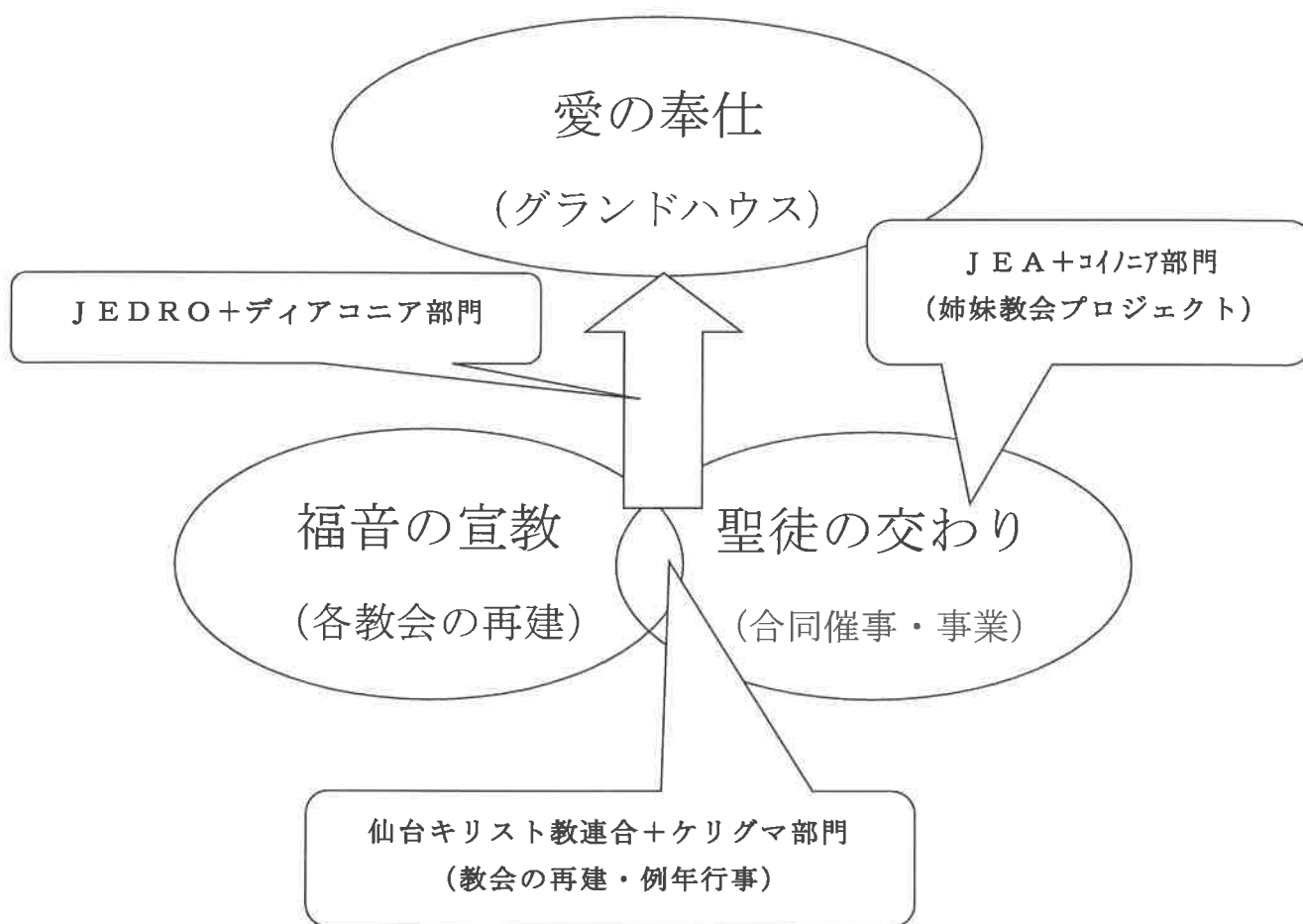
【規約「目的」】

(目的)

第3条 東北ヘルプは、被災教会を支援し、教会を通して被災者の自立を支援することを目的とする。

「被災地から、全ての被災教会を支援し

全世界の教会を通じて、全ての被災者を支援する」



東北ヘルプ ケリグマ部門予算=教会の直接宣教支援に限定した予算

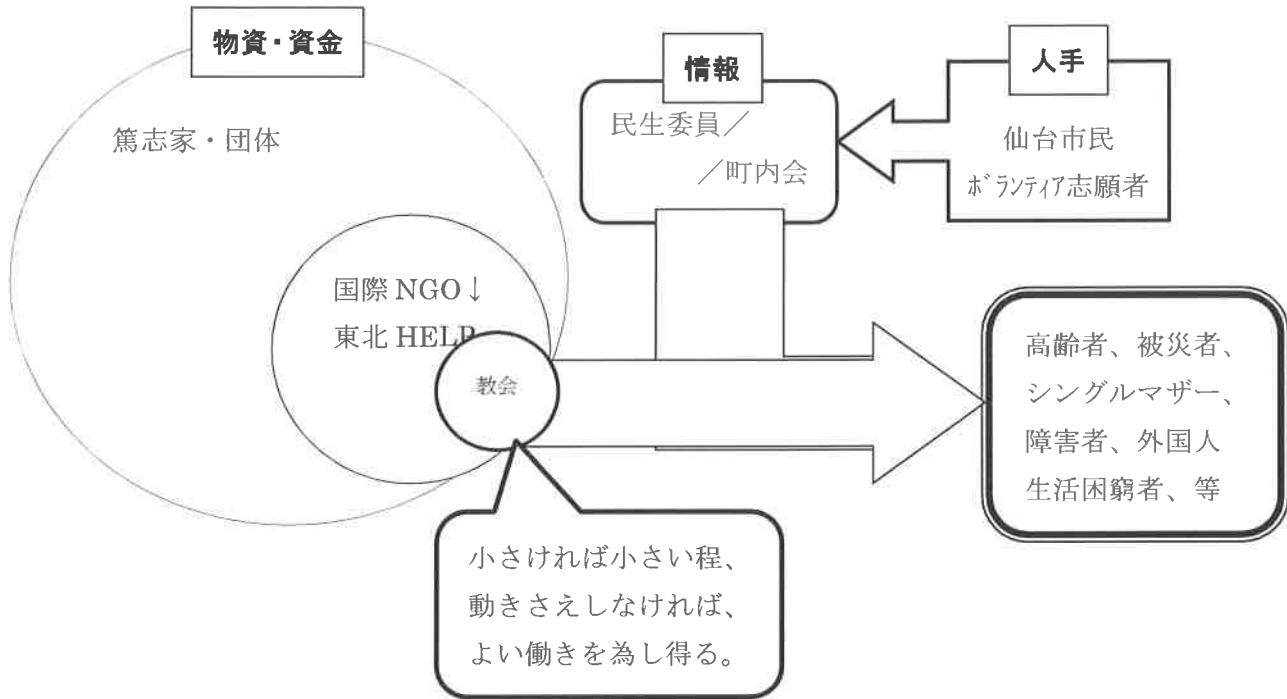
東北ヘルプ コイノニア部門予算=教会のネットワーク構築に限定した予算

東北ヘルプ ディアコニア部門予算=教会による人道的民生支援活動に限定した予算

資料5：支援の原則

「教会にできることと」は、「何もしない」で「そこにいる」ことを、し続けること。

図 支援の流れ



【東北ヘルプが支援すべき「被災者」とは誰か】

「2011年3月11日に発生した地震・津波・原発事故によって、その生活に甚大な影響を蒙ったすべての人の内、主に東北地方太平洋沿岸各県に居住する人々」を、東北ヘルプは支援している。（外国人被災者支援プロジェクト共同運営委員会で議論し、東北ヘルプ理事会にて承認された原則）

【東北ヘルプ クリスチャンコード（「理事会」承認）】

1. 「教会の再建と教会を通じた被災支援」の目標のために、意思決定の主体として、教会関係者を配する。
2. 意思決定者の主体を支えるために、専門家を配する。
専門家は、キリスト教を尊重する者（共に祈れる者）とする。
3. その他現場での庶務のために、アルバイトを雇用する。
アルバイトは、キリスト教を理解している者とする。

資料6：「グランドハウス・プロジェクト」の経緯と主旨

東北ヘルプ

Touhoku HELP 東北ヘルプ

Emmaus 2F Room D,
1-13-6 Nishiki-cho Aoba-ku Sendai-shi Miyagi-ken
980-0012 JAPAN
〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ2F D

TEL.022-263-0520/FAX.022-263-0521
http://tohokuhelp.com

Executive Director: Rev. Takashi Yoshida
代表 吉田 隆

Board of Directors: Rev. Naoya Kawakami, Rev. Chihiro
Saegusa, Rev. Hanae Igata, Rev. Syouei Abe
理事会： 川上直哉、三枝千洋、井形英絵、阿部頌栄

Victor Hsu ビクターシュー
Senior Adviser シニアアドバイザー

東北ヘルプ事務局 第一年度終結に向けて

東北ヘルプ事務局は、6月30日を以て、第一年度を終了します。第一年度の終了を以て、これまでの東北ヘルプ事務局の活動は終了することになります。そして、まったく新しい体制で、しかし初心に戻って、7月からの活動が始まります。そのことを、事務局長より、皆様にご連絡申し上げます。

「東北ヘルプ」という団体は、「仙台キリスト教連合被災支援ネットワーク」の略称です。それは「仙台キリスト教連合」の被災支援部門として、2011年3月18日に誕生しました。発足当初、事務局は、私（川上）と阿部頌栄牧師（日本ナザレン教団仙台富沢教会）の二人で担うことになりました。

2011年4月と5月、二度にわたり、韓国にて、震災被災者支援のための国際会議が開かれました。東北ヘルプからは吉田隆代表が出席しました。会議では現地事務所の必要性が確認されました。そして日本キリスト教協議会の皆様が、私たちに現地事務所の開設を打診してくださいました。

2011年6月、私たちは真剣に祈り、議論しました。私たちは、6月を以て事務局を終えるつもりでいたのです。しかし、事務局を継続し、かつ、本格的な規模へ拡充するよう、要望を頂いた。それは確かに、被災地に仕える大きな業となることでしょう。しかし、私たちにそれが担えるか。

祈りの中にある私たちに、神様は、多くの人々の助言を通し、溢れるほどの励ましと知恵をくださいました。そして、私たちは決断しました。海外からの要請を真摯に受け止め引き受けることとしたのです。2011年7月のことです。

その後、苦心惨憺の結果、3ヶ月をかけて、2011年9月に「財団法人 東北ディアコニア」が誕生しました。準備を始めた7月から数えて、翌年6月までが、一年度の区切りとなりました。

国内外の諸団体・個人の方々が、祈りを込めて、私たちの決断を支援してくださいました。特に日本キリスト教協議会の皆様は、私たちのために海外の諸団体に資金申請をしてくださり、大きな資金を獲得してくださったのでした。

そして私たちは、情報と資金を繋ぎ・流通させる「グランドハウス・プロジェクト」を始動させたのです。

「グランドハウス・プロジェクト」とは、具体的には、以下のようなものです。

- (1) 仮設住宅内事務所と本部事務所の二つの極によって情報を収集・整理する。
- (2) 収集した情報に基づいて長期的な支援プログラムを構築する。
- (3) プログラムに基づき資金申請を行い、プロジェクトを実行する。
- (4) プロジェクトの進捗状況に基づき、新たな支援プログラムを構築する。
- (5) 上記(3)へ戻る。

この活動により、私たちは107の団体と連携し、57のプロジェクトに関わり、364,110人の方々を支援しました。そして、私たちは4つの長期的支援プロジェクトを新規に立ち上げることができたのです。

私たちは、上記の結果を報告書にまとめ、既にホームページに掲載いたしました。この報告書を受けて、日本キリスト教協議会の皆様は、第二年度目の資金申請を海外に出してはどうかと、提案してくださいました。そこで私たちは、長期的な展望を立てて、資金申請のための基盤を固めました。それは、以下のようなものです。

i) 2011年7月～2012年6月＝第一年度:どんな支援が可能であるかを模索する。

⇒ 結果:57のプロジェクトに関わり、5000軒以上の仮設住宅を支援し、4つの独自プロジェクトを立ち上げ、計測不能な人数の受益者を得た。

ii) 2012年7月～2013年6月＝第二年度:どの支援プロジェクトを維持するかを選定する。

⇒ 指標:支援するプロジェクトの精査を行い、自立させられる見通しを得られないものの支援を打ち切る。各プロジェクト自立のために、国内外に情報を発信し支援者を募り、また、関係者の会議を行って各プロジェクトと他の団体との連携を図る。

iii) 2013年7月～2014年6月＝第三年度:各プロジェクトの自立を促す。

⇒ 指標:各プロジェクトを自立させる。自立したプロジェクトが軌道に乗るために情報発信を行い、会議を行う(韓国で行われる2013年度WCC総会・2014年度WEA総会へ、被災地の情報を繋げる)。

iv) 2014年7月～2015年6月＝第四年度:終結の作業を行う。

そして今、第一年度の終了の日が近づきました。しかし残念ながら、新年度の資金について、日本キリスト教協議会の皆様の最善の努力にもかかわらず、まったく目途が立っていない状況にあります。国内の皆様からの貴重な支援は、継続しています。しかしそれでも、新年度を開始するために十分な資金については、現在のところ、獲得できる見通しを得ていません。

この暗い見通しを得たのは、今月初旬のことでした。そして先週、遂に私たちは、一つの決断をしました。それは、以下のようなものです。

(1)現状の東北ヘルプ事務局は、6月30日を以て、一旦、終了する。

(2)尚、国内から頂いている支援金を用いて、できる限りの事務局機能を維持する。

(3)継続して海外諸団体への資金申請を行い、上記4年計画が完遂されるよう最大限の努力を行う。

この結論に至る過程で、私たちは本当に大きな訓練を頂きました。皆、本当に熱心に祈ることを学びました。そして、祈りが持っている力の大きさを、私たちは実感させられています。

今、新約聖書の言葉を思い出します。

信仰によって、モーセは・・・むしろ神の民と共に虐待されることを選び、
キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。

地震と津波と放射能に見舞われた被災者のことを思います。その見通しのつかない日々の苦しさを思います。私たちは、被災地において、支援する立場にありながら、今やっと、少しだけ、そうした人々の苦しみを共感する幸いを得ているのだと、そう思います。今、私たちは辛い闇の中にいるのですが、しかし、神様と共にいるように思います。その実感は、ただひたすら、祈りによって得られたものです。

今、事務局長として、主にある兄弟姉妹に願います。私たちの志と被災地の痛みを覚えてくださり、どうぞ、祈りの支援を賜りますように。祈りの支援こそが、私たちの盾となり、あらゆる絶望を跳ね返すことでしょう。

神様の業は、きっとまだ、始まったばかりなのです。今は、祈りに守られて、踏みとどまりたいと願っています。どうぞ、お祈りくださいますよう、お願いをいたします。

以上、一年間の終結を見据えて、報告と要請をいたしました。

(2012年6月25日 川上直哉 記)

資料7：4年計画2011年7月～2012年6月＝第一年度：どんな支援が可能であるかを模索する。

⇒結果：57のプロジェクトに関わり、5000軒以上の仮設住宅を支援し、4つの独自プロジェクトを立ち上げ、計測不能な人数の受益者を得た。

2012年7月～2013年6月＝第二年度：どの支援プロジェクトを維持するかを選定する。

⇒指標：支援するプロジェクトの精査を行い、自立させられる見通しを得られないものの支援を打ち切る。各プロジェクト自立のために、国内外に情報を発信し支援者を募り、また、関係者の会議を行って各プロジェクトと他の団体との連携を図る。

2013年7月～2014年6月＝第三年度：各プロジェクトの自立を促す。

⇒指標：各プロジェクトを自立させる。自立したプロジェクトが軌道に乗るために情報発信を行い、会議を行う（WCC・WEAを含む）。

2014年7月～2015年6月＝第四年度：終結の作業を行う。

資料8：祈りによらなければ

僕たちは、この世の中で生きなければならない——「たとえ神がいなくても」——ということを経験することなしに、誠実であることはできない。しかも、僕たちがこのことを認識するのはまさに、神の前においてである。神ご自身が僕たちを強いてそのことを認識させ給う。このように、僕たちが成人することによって、神の前における僕たちの状態を正しく認識するようになるのだ。神は、僕たちが神なしに生活を処理できるものとして生きなければならないということを経験し、僕たちに知らしめ給う。僕たちと共にいたもう神とは、僕たちを見棄て給う神なのだ（マルコ15章34節）。神という作業仮説なしに僕たちにこの世の生を営ませる神は、僕たちが絶えずその方の前に立っている神なのである。神の前で、神と共に、僕たちは神なしに生きる。神は御自身をこの世から十字架へと追いやり給う。神はこの世においては無力で弱い。そして神はまさにそのようにして、しかもそのようにしてのみ、僕たちのもとにおり、また僕たちを助け給うのである。キリストは彼の全能によってではなく、彼の弱さと彼の苦難によって僕たちに助けを与え給うということは、マタイ8章17節に全く明瞭である。

この点に、あらゆる宗教に対する決定的な相違がある。人間の宗教性は、人間が困窮におちいった時にこの世における神の力を示す。その時、神は機械仕掛けの神である。聖書は、人間に神の無力と苦難とを示す。苦しむ神のみが助けを与えることができるのだ。その限りにおいてその無力さによって力と場所とを獲得する聖書の神を見るようにその目を解放するということができるのである。

——ボンヘッファー『抵抗と信従』（倉松功・森平太訳、新教出版社、1964年）253頁。

支援の3原則

1. 準備して「待つこと」
2. 新しく「創ること」
3. そのために「祈ること」

東北ヘルプ

Touhoku HELP 東北ヘルプ

Emmaus 2F Room D.
1-13-6 Nishiki-cho Aoba-ku Sendai-shi Miyagi-ken
980-0012 JAPAN
〒980-0012 宮城県仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ2F D

TEL.022-263-0520/FAX.022-263-0521
<http://touhokuhelp.com>

Executive Director: Rev. Takashi Yoshida
代表 吉田 隆

Board of Directors: Rev. Naoya Kawakami, Rev. Chihiro
Saegusa, Rev. Hanae Igata, Rev. Syouei Abe
理事会： 川上直哉、三枝千洋、井彩英絵、阿部頌栄

Victor Hsu ビクターシュー
Senior Adviser シニアアドバイザー

東北ヘルプ事務局 第二年度の始まり

2011年7月になりました。この月から、東北ヘルプ事務局は新しい歩みを始めます。

「東北ヘルプ」は、3月18日をその始まりとしますが、その事務局は、7月を始まりとしています。これは、当初牧師二人だけのボランティア体制であった「東北ヘルプ事務局」が、7月から、人を雇用して本格的な活動を始めたからです。

残念ながら、新年度の資金的な見通しは、まだ立っていません。そしてそのために多くの方々が真剣な努力を続けておられます。他方で、被災地の状況は刻々と劇的に変わり、常に新しい必要が生まれ続けています。神様は、私たちに何を求めておられるのでしょうか。今はひたすら、祈りに励む毎日です。

先週理事会で決定したことをご報告いたします。事務局の体制としては「9月まで」を一つの標語としています。今、本当に驚くべき数の人々が、熱心に祈って下さっています。今、私たちは、神様からの応答を待たなければなりません。今は、待つことが、私たちの仕事です。しかし、無為に待ってられるほど、被災地の状況は安楽ではない。ですから、できることを全て行いながら、待ちます。それで私たちは、「9月まで」可能な限り今の体制を維持し、与えられたミッションを遂行する。そのためにできることはすべてする。それが、今月から始まる最初の業務となります。

7月を起点とする現在の事務局は、正式名称を「東北ディアコニア」と申します。「ディアコニア」とは、ギリシャ語で「奉仕」を意味します。しかしその原義は、「埃（ほこり）をたてる」という言葉であると聞きます。

日本語では、「棚から牡丹餅」という言葉があります。バタバタと動き回り埃を立てて、七転八倒しながら神様の御業を見ようと待っていれば、あるいは、天からウズラが降ってくることもある、のではないかと——そんなことを、「ディアコニア」という言葉は、含意しているようにも思われます。これは、言葉遊びです。しかし、希望を思い出させる言葉遊びのようにも思われます。

今、1年と100日を超えた被災地であって、私たちの周りでは、多くの新しい問題が生じています。努力を極め、善意を積み上げているのに、組織がうまく機能しない。そして、窒息するようにして、支援団体や住民自治組織が崩れて行く。そうした事柄を、たくさん見ています。それが、今の被災地の苦しみです。そして今、私たち東北ヘルプ事務局は、その苦しみを共にする榮譽を得ているのだと思います。

そしてその苦しみの中で、私たちは、祈りの力を体感しています。祈りは、あらゆる絶望を跳ね返す盾です。私たちは、被災地の直中に、この盾に守られて、感謝と賛美を以て立ち続けたいと願っています。

この一年で、私たちは信じられないほど大きな恵みを頂きました。それは、NCCとJEAをはじめとする諸団体の皆様の祈りの力によるものです。私たちは感謝の言葉の他なにも持ちえませんが、この感謝は、私たちのここまでの足跡そのものです。そしてその足跡の先にだけ、神様がお示しになる約束の地はあるのでしょうか。

今は、神様の示される道がどこにあるのかを見極める時です。祈りが必要です。恐れに駆られる拙速と、怠慢に流される不作為と、その両極の過ちから、私たちが守られますように。どうぞ、皆様のお祈りを加えて下さい。

以上、新しい年度の始まりに当たり、感謝を込めて、事務局長より挨拶を申し上げ、祈りの要請を申し上げます。

(2012年7月1日 川上直哉 記)

Session II

「それぞれの3月11日を振りかえって」

今大会に参加している青年の多くは、被災地以外で震災当日を過ごしている。その時、どこにいて、なにを感じ、なにを見聞きしたのか。

その後の心情や今までの経験などを、グループに分かれて話し合い、また、みんなの前で発表し、分かち合った。

◆京都では3月11日当日、揺れていることに気がつかなく、夕方、テレビをつけて初めて大惨事を知った。震災直後に関西電力が東京電力に電力を送るため、節電を促すチェーンメールが入る。しかし、実際、各々ワット数が異なるので偽とわかった。

◆沖縄では震災当日、沖縄にも津波警報が鳴り、ラジオで情報収集をした。

ラジオでかなりひどい状況と知る。他教区の主教を応対していて、主教より、情報収集してお祈りしましょうと言われた。

◆直接、節電の必要はなかったのだが、節電して、節約できたお金を募金しようと思った。震災を通して、自分の身の周りに様々なものが備わっていることに気がつくことができた。

◆各教区の青年の体験を聞いて、いままで、テレビの映像を通して、自分自身、体験した気持ちになっていたが、自分の経験が全てでないことに気がつかされた。

◆大阪教区の青年は、この振り返りを通して、ボランティア活動、その他、見たことを伝えてゆくことが大切と思った。

◆青森には、六ヶ所村に原子力使用済核燃料再処理工場がある。そのことを伝え続けていかなければと、思った。

◆東北で行われる全国青年大会、果たして、青年はいるのだろうか？と思って来た。

◆3月11日、常磐線に乗っていて、福島県、相馬市付近に。20分程、遅延していたので、定刻通りならば、浪江町にいるところだった。周りの家は、瓦が落ちて、沿岸より、砂嵐のような白い煙が見えてきた。仙台までタクシーで帰宅。その後3週間の断水。髪も洗えず、精神的に追い込まれる。仙台に帰ったあとの記憶がない。

◆若松聖愛幼稚園は東北教区で最古の幼稚園。震災前に耐震補強をしていたが10年しか持たないと言われ、2011年はそのちょうど10年目。震災で倒壊は免れたが、柱にヒビが入り、現在、改築中。3月11日当日、若松聖愛幼稚園では、下から地鳴りのようにゴーツという音が。

幼稚園では、避難訓練で、地震が起きたら、まず、机の下に身を隠すよう子どもたちを指導していたが、机の下では下敷きになると感じ、園庭へ避難した。そして、倒壊の覚悟を決めて、みんなで建物に背を向けてしゃがんだ。建物は、大丈夫だったが、子どもたちは泣き始めた。大きな揺れが収まり、余震が続くなか、園庭にブルーシートを敷いて、毛布とブランケットで暖をとりながら、保護者の迎えをまった。

◆子どもたちのために教会にできること、そして、子どもたちの命を守るため、会津若松は福島の中なかでも比較的線量が低いほうなので、若松聖愛幼稚園は、幼稚園存続を決めた。

◆主教：今回の震災は、直接、被災した方々より、周囲の方々への情報伝達が速かった。3日目に初めて津波の写真を見て、4日目に東北でも何かをしなければと思う。まわりからの支援の申し出に、当初はとまどっていたが、多くの人に助けられた。

・東北での全国青年大会。いままで、参加しないこともあってか、東北の教会は、他の地域の教会に比べて遠くにいるように感じていた。

・自分の生活で精一杯。

◆震災前までは、高校時代は部活が忙しく、教会から離れていた。高校を卒業して、大学は震災の影響ではじまりが5月から。京都のほうから、青年が奉仕に。はじめは、見た目のインパクトから、馴染めない気持ちが先走ったが、このような青年も助けに来てくれているのだと、交わりのきっかけに。再び、教会と結び付けてくれた。

◆震災以降、いっしょに歩こうPは忙しい日々を送っているが、自分は言葉の壁もあってか、被災者の方々とのおんびりコーヒーを飲む機会のほうが多い。

家族は、韓国へ戻り、2人の息子は対照的。1人は、日本は怖いところだから、父に早く韓国へ戻ってきてもらいたいという。しかしもう1人は、日本が大好きで、将来、自分が日本へ勉強をしにゆきたいので、父には、今、日本で頑張ってもらいたいという。

◆震災当日は名古屋のカフェで働いていた。名古屋は震度4で、断水もなくライフラインは通常通り。テレビで惨状を知る。震災以降も、名古屋はいつも通り。カフェにお客様もいつも通り来店。

カフェが6月に倒産。野村先生に声をかけられて、いっしょに歩こうPのある仙台オフィスへ。8月までは月に数回仙台オフィスへ。名刺やポスター作りをする。仙台オフィスより、外へは出なかった。繁華街である仙台の国分町は賑わっているように。しかし実際被災した場所を見ると、映像で見る惨状とのギャップを覚える。

名取の仮設住宅へ訪れて、ある被災者の方の物語に触れて、心境の変化が起こる。

人を通して、東日本大震災のことが自分の中に入ってきた。

◆震災当日は仙台で過ごしていた。停電のため信号がとまっていたが、車は混乱することなく、お互いに譲り合っていた。ライフラインは概ね止まっていたが、水はでた。

自分たちが生きることで精一杯。街では、2～3hかけて八百屋で野菜を購入する風景が見られた。その折り、若い八百屋さんが嫌な顔をひとつせず、笑顔で働いていた。

自分には住む家があり、家族もいる。しばらく罪悪感を覚える。

◆釜石へボランティアへ行き、様々な人に震災のことを伝えて、忘れないことが大切と思う。東京では、震災以降、繁華街が自粛ムードに一時なっていたように思えた。自分は居酒屋でアルバイトをしていたが、予約キャンセルが結構あった。違和感を覚える。

大学に入り、被災した学生と出会う。周囲が一概に被災者とくくるのはどうなのかと思った。

◆東京では、震災報道が少なく生活も今まで通り。震災のことを自ら意識していなかったが、父（司祭）の震災に関するエピソードを聞いて、実際、自分が震災について何もわかっていないことを知る。被災者とのように繋がってゆけば良いのか？この全国青年大会に自分はなぜ参加するのか？自問していた。

◆釜石で写真洗浄の奉仕を体験。そこで写真1枚1枚に写った方の人生を見ることができた。毎回の奉仕を経て、顔なじみの方ができる。次は、作業をしにだけでなく、その方々に会いにゆきたいと思うようになった。

◆愛知では、花火の元が福島で作られたということで放射能問題で花火大会が中止に。その他、瓦礫の受け入れ問題、福島産の野菜についてなど、選択の厳しい事柄が複数存在することに、嘆く。

◆大田教区の青年。日本の青年が、この大会において、集団生活をお互いに配慮しながら生活を送っていることに感心した。

◆横浜教区のある青年。被災地で実際に何が起きているのか、確かめるために参加した。自分は涼しいところにおいて、携帯のバッテリーも自由に使える、原発事故による電力供給不足は、自分にとり、他人事になっていた。しかし今回参加して自らの問題として捉えてゆかなければと思っている。

◆福島では、放射線量の影響かわからないが、大きなチューリップを見かけた。福島では水道の水も汚染されている可能性があるため、飲料水を購入している。月に¥4,000ほどかかっている。原発は人と人との関係を壊してしまう。ある幼稚園の保護者は、しばらく幼稚園をお休みをします、とだけ伝え幼稚園を去っていった。

◆出てゆけない人々は、覚悟を決める。郡山は線量が0.4。レントゲン室（線量0.5）は病院の管理区域に指定されているので、そのような空間に常時、身を置いているようなもの。

◆残った人は、放射能が危険とは言えなくなった。司祭がガイガーカウンターで線量を計測していると、周りから、残って生活している自分たちにとってはその行為は無駄と言われる。自分は遠くに行ける立場であることに後ろめたさを覚える。

◆小名浜のほっこりカフェでは、70人の人が集まる。1杯のコーヒーが果たす役割の大きさを感じる。その場で、仮設で暮らす人々の安否を確認できる。談笑により住民の心をほぐしている。

◆釜石神愛幼稚園での奉仕のときのエピソード。こどもがお葬式ごっこをしていた。

絵本の読み聞かせのときに海のシーンが。津波を思い起こさせるのでは？そのシーンを読み聞かせすべきかどうか迷った。

子どもの発散方法をどのようにすれば良いのか？絵をかかせると、そのストレスが表れている。

◆祈りとは何なのだろうか？礼拝で嘆願があるが、神さまは、本当に聞いて下さっているのだろうか？

・震災以降、テレビでは、“祈り”を口ぐちにしているが、実際、祈りとは何なのだろうか？

Session IV 「分かち合い」

8グループに分かれ、セッションⅠ～Ⅲを終えて、感じたこと、考えたことなど自分の意見を述べ、グループ内で分かち合った。

一枚の紙に、グループごとに話し合ったことをまとめた。



各グループ8名程度で
話し合いを進めます



志津川（南三陸町）コース

コース：秋保グランドホテル発→仮設商店街「南三陸さんさん商店街」着→ガイドの齋藤さんと合流→南三陸町役場防災対策庁舎→堤防、宮城県漁協志津川支所→齋藤さん自宅→再び「さんさん商店街」→名取市閑上地区→荒浜

■さんさん商店街にて

予定より早く到着したため、ガイドの齋藤さんの到着まで商店街を散策。商店街に立ち並ぶ店へ足を運び志津川の海産物を買うなどして楽しんだ。買い物をしながら店員に話を聞くなどもしていた。この商店街に出店している方の多くは震災により自宅、職場が大きな被害を受けており、ある店舗の若い店主は震災前は海沿いの大型スーパーで海産物を販売していたそうだ。津波の後が残るそのスーパーはまだ取り壊されていなかった。

ガイドの齋藤さんと合流したのちバスの中で軽くガイドダンスを行った。齋藤さんご自身が地元の漁協に所属する漁師であること、船を津波で失い、震災後に購入した船を乗り合いで使用しながら志津川で漁業を再開していることなどをお聞きした。また、齋藤さん自身は家族を失っていないし、震災のこと、志津川の事を伝える事が自分の役割だと思っているから遠慮せずに気になる事があったらきいてほしい、と話してくれた。

・南三陸町役場防災対策庁舎

志津川において記念碑のようにになっている。この日も献花台に多くの花が供えられ、聖公会以外に2つの団体が訪れていた。震災を忘れないためにこの建物を保存するか否かで町の中で、特に遺族間でも意見も割れているようだ。齋藤さんの親族もここに勤務していたが、未だに行方不明らしい。

・堤防、漁協

漁協の建物が残る海沿いまで来ると、足下のコンクリートは割れ、漁具や瓦礫があちこちに残ったままになっていた。漁協の建物は壁が破壊され、津波に襲われた内部がそのまま外から見えた。漁協の職員の中では支所長だった男性が亡くなっている。外壁の高い位置（おそらく8.7mの高さ）には黄色いテープで「→8.7」と記され、その下には「↑新堤防高すぎ！！」という言葉も書いてあった。志津川の新堤防の計画に異議を唱える人の声だと齋藤さんが教えてくれた。今も残る堤防にみんなで登ると、この堤防も、計画された時には高すぎる！と反対の声が上がったそうだ。近くには壊れた水門が半分だけ残っていた。

・齋藤さんの自宅

漁協の近所だった、齋藤さんの自宅があった場所へ。齋藤さんの自宅は、家の基礎部分だけが割れて残り、地盤沈下によって周囲は小さな池のようだった。そこは、海へ続く道が

通っていた場所だそうだ。コンクリートの基礎を指差して、齋藤さんは「あれ、オレの家。」と教えてくれた。どこかに奥さんの集めていた貯金箱もあるはずだ、と言っていた。近所に齋藤さんのお母さんが住む実家もあったそうだ。震災当日、齋藤さんは奥さんといっしょに作業をしていた。たまたまいっしょにいる時だったから、家族全員無事に避難できた、運が良かった、と話していた。参加者は、震災後に新しく盛り土され舗装されてできた道に立ってその話を聞いた。

バスのなかで質疑応答の時間があった。フィリピン人の奥さんは、震災後に母国に帰るという選択はしなかったのか、と質問すると「結婚する時に、神様に辛いときも共に過ごすと言ったのに、こんなに辛い時に離れる訳がない」と奥さんに言われたのだとお話ししてくれた。

■名取市閑上地区

予定より早く志津川を出発したため、仙台東部道路を通り名取市へ。南北に伸びる道路を挟んで、海側と内陸側で全く違う様子を車内から見た。下車し、閑上地区が見渡せる高台、日和山へ。震災直後は残っていた建物も解体され、草に埋もれてコンクリートの基礎だけが残っていた。どんなに想像しようとしても、家があって人の生活があった場所だと思えない、と参加者は言っていた。

石巻コース

コース：秋保グランドホテル発→JR 仙石線野蒜駅→大川小学校→門脇小学校→日和山公園着、昼食、ガイドの遠藤さん、佐藤さんと合流→石巻市内→堤防→石巻市立女子高等学校→日和山公園→荒浜

ガイドは、いっしょに歩こう！プロジェクトの働きの中で出会った石巻に在住の遠藤さんと、石巻を中心に震災の復興ボランティア活動をしているルーテル教会の佐藤さんをお願いした。日和山公園で合流したあと、バスで石巻市内、沿岸の堤防、最後に遠藤さんが通っていたという高校を案内していただいた。石巻市内を走る中でまず心に残った言葉は「目印にしていたものがすべてなくなった」というものだった。日和山の麓の道は建物が建っておらずすべてが更地だった。その道を通るときに「ここにはコンビニがあった」、「ここにはガソリンスタンドがあった」と遠藤さんがぽつぽつと言葉を漏らした。津波により、日和山から内陸部は川沿いを除いて被害が少なかったが、日和山から沿岸部はほとんど流された。そんなとき、山肌は崩れた所もあったが唯一『目印』として姿を変えなかった日和山は、震災直後被災者の『灯台』となっていたという。

その後、遠藤さん、佐藤さんの説明のもとで市内の中心部を走る中、遠藤さんが遠藤さん家族の震災当時の話を涙ながらにして下さった。地震が発生した当時、遠藤さんは母親とともに自宅にいたという。2階にいた遠藤さんは1階にいた母親を呼んだそうだが、一度2階に上がった母親は何かを取りにまた1階へ降りていってしまった。そのとき津波が押し寄せ、遠藤さんの母親は津波に飲み込まれてしまったという。

堤防に到着してからは波の強さ、怖さを目で見ることができた。10m以上ある堤防が綺麗に倒れていたのだった。よくみると周りには食器の破片等が土に埋まっており、波の引く力も相当だったことがわかった。

JR 野蒜駅

JR 仙石線の駅であるが、東日本大震災以降この駅まで開通していない。線路は土に埋もれ、雑草も生え茂っていた。車道に建っていたであろう標識、電車の鉄塔なども線路内に横たわっており、使われなくなってからしばらく経っているということを物語っていた。また、駅のホームから少し視線を動かすだけで、津波で運ばれて来たであろうと思われる船が無造作に置かれており、震災以降手つかずの領域だということが考えられた。

大川小学校

予定よりも移動にかからなそうだったため、大川小学校に足を運んだ。大川小学校は沿岸から 10km 離れているにも関わらず、児童、職員の多くが津波により亡くなった場所だ。この場所は献花台が置かれ、毎日多くの人を訪れているという。この日も多くの人々が献花台に花を添えていた。

門脇小学校

門脇小学校は津波後に火災も発生し、丸 2 日燃え続けたという。しかし、在校児童は職員、地域住民とともに裏山にあたる日和山に避難し、全員助かったという。校舎、体育館などは黒く焼け焦げ、ひとめ見るだけでどれほど炎の勢いが強かったのか伝わってくる。

日和山公園

石巻市の観光名所でもあり、連日多くの人で賑わっている。石巻市内、特に沿岸部を一望することができる。公園の柵の各所には震災前にその場所から観えた景色の写真パネルが設置されており、現在の景色と比べて観ることができる。東日本大震災のときには多くの人々が日和山に登り、津波から逃れた。

新地町コース

コース：磯山聖ヨハネ教会→ときわ旅館跡地→いっしょに歩こう!プロジェクトしんちベース→新地駅跡地→製氷機工場→またや水産跡地→埴浜、釣り師浜間元墓地→斉藤研さんアトリエ

ガイドは、磯山聖ヨハネ教会の信徒である三宅信一さん、中曾渉さんをお願いした。初めに磯山聖ヨハネ教会にいき、越山哲也司祭司式のもと礼拝堂でお祈りを捧げた。震災当時多くの人の避難場所となりそこで一夜を過ごした人もいる聖ヨハネ教会は、聖公会に携わる参加者にとってとても印象深いものとなった。

すぐ近くにある海岸からは海が見渡せ、後ろを振り返ると一面に津波被害にあった更地が見渡せる。

そしてそこにあったはずのときわ旅館の説明を受けた。ガイドをして下さった中曾渉さんのご祖父母が営んでいた旅館は、建物は跡形もなく、人もろとも津波に流されてしまった。

昼食はいっしょに歩こう!プロジェクトしんちベースでとり、スイカや漬物などの振る舞いも受けて、食事をしながら、プロジェクトの活動報告をブラザー松本普さんより受けた。

資料も配布され、とても丁寧にわかりやすく説明して下さいました。

午後は新地駅のあった場所へ。ガイドをして下さった三宅さんは震災前新地駅に努めていたためとても熱心に説明してくれた。しかし、元そこに駅があり、電車が走り、周りには住宅が広がっていたとは、いくら説明を聞いても、あまり結びつかない様子で、線路があったと思われる場所を歩いてみたり、ホームだった場所の崩れたコンクリートの上ののってみたりしながら、駅の風景を思い浮かべていた。

・製氷機工場

バスに乗ったまま、製氷機工場をみる。建物はぼろぼろで、窓ガラスが割れているため中が見えたが、流されてしまっただけには何もなかった。また、二階建ての建物の上部にまで水が来たことが確認できた。

・またや水産跡地

バスに乗車したまま見学。高台にある建物だが、水がこの高さまで襲ってきたことがわかり、震災当日ここで過ごしていた方が、海が「黒い壁」になっているのを目撃したという。これが津波だった。

・埴浜、釣り師浜間墓地跡

海沿いまでくるときれいな砂浜と半円に広がる浅瀬のような海が目の前にあった。ちょうど真夏のこの日は、このような海辺で遊べたら最高に気持ちがいいだろうと思った人もい

たはずだが、そこには子ども1人さえもいなかった。

そこは、震災前は墓地だったという。私たちがお話を聞いて立っている場所は、農作物を育てていた畑で、現在半円に広がっている海がある場所は、墓石が立ち並ぶ墓地だったという。

しかし津波によりそれらは流され、未だ半分以上も見つからず、見つかった墓石も、数十メートル先の陸に瓦礫のように無残に積み上げられていた。

海をよくみると、確かに堤防らしきものはるか向こうに見える。

地盤が沈下し、水が浸食してきてそこが海になってしまったという。

近未来、ここの埋め立ての話も出ていて住民の中でも賛否両論だと言っていた。

最後に、現在磯山聖ヨハネ教会が使用できないため、場所を間借りして主日礼拝を行っている、信徒の斉藤研さんのアトリエへいった。

そこにはほぼ原寸大に描かれた三宅信一さんの絵があった。タイトルは「天国と地獄」。三宅さんと斉藤さんは幼馴染で、この絵には震災に遭った三宅さんの心情描かれていた。参加者たちは所狭しと飾られた絵をみながら、斉藤さんのお話を伺った。

帰りのバスで、三宅さんは自分の体験談を話してくれた。

その日津波が起こり磯山聖ヨハネ教会に避難するとそこには知り合いの姿はあるが、自分の家族の姿はない。一晩を明かし、探しに行くが、元あった場所に家はなく、家族の姿も見当たらない。必死に妻と孫の名前を呼びながら探す、どこにもいない。そのとき「神」とはなんなのか、「なぜ自分だけこの世に残したのか」とその存在を恨んだという。途方に暮れながら歩いているとふと孫が自分を呼ぶ声がした。しかし、振り返る勇気がなく空耳だと思い込み、またしばらく歩くと、こんどははっきりと「じいちゃん！」と孫の呼ぶ声がした。振り返ると、そこには妻と二人の孫の姿が。その時に、神さまは天から見守って下さるのでもなく、側にいて下さっているのでもなく、常に私たちの中にいるのだと感じた。と話てくださった。参加者もこの話に感銘を受けたそうだが、同時に同じくガイドをされている中曾さんはお母さんを亡くされているのでどんな心情で聞いていたのだろうか、と心配する参加者も少なくはなかった。

荒浜

3つのコース（志津川、石巻、新地）に分かれての被災地巡礼を終えて、参加者は仙台市若林区荒浜の深沼海水浴場に集合した。実行委員会では被災地巡礼のコースや内容については何度も話し合いを重ねた中で、特に時間をかけたのが最後にどこかに集合して祈りを捧げたいという思いをどのような形で実現するかということであった。時間的に全員が集まるのは難しいのではないかとということで集合場所については最後まで決まらなかったのであるが、どのコースも仙台に戻ってくること、そして仙台市の沿岸部の状況も知って欲しいということから「荒浜」に集合することを実行委員会で最終的に決定した。

「荒浜」は、仙台市若林区荒浜地区であり、仙台市で唯一の海水浴場である深沼海水浴場がある場所である。東日本大震災によって発生した大津波によって震災当夜には溺死と見られる遺体200～300人が同地区で発見されたことが大きく報道された。仙台市の中心街は見た感じでは震災の爪痕を見ることはできないが、中心部から車で数分走れば震災の津波による爪痕を見ることができる。毎夏には仙台市民の憩いの海水浴場として賑わっていたであろうこの場所にその面影はなくなってしまった。この地に立つと本当に悲しみが湧いてくる。

荒浜で拾った木で作った十字架を中心にして、参加者全員が輪になって祈りを捧げた。「東日本大震災のための嘆願」を、参加者を5グループに分け、5つあるお祈りを1つずつ、心を一つに捧げた。この仙台の地で全員がひとつとなり、共にお祈りを捧げることができたことは大会の中で特に印象に残る出来事であった。



教区紹介

各教区ごとにステージに上がり、教区で行っている活動などを発表した。

真面目に活動をする教区もあれば、歌や踊りを交えて発表したり、漫才をしたりする教区もあり、笑いが絶えない、心安らぐひと時となった。





中部教区



大阪教区



京都教区



九州教区



神戸教区



沖縄教区



大田教区



青年委員会

聖餐式

今聖餐式では、3日目の被災地巡りの際、全コースが集まった「仙台市荒浜」で拾った木で作った十字架を用いた。

またその付近に咲いていた花を献花し、被災地を憶えて祈るという、シンボルにもなった。

今大会中の礼拝では、すべて式文や聖歌集などを用意せず、プロジェクターを用いた。

全員が前を向き、同じ方向を見ながら礼拝を捧げることが出来るようにとこのようにした。

持ち物の軽減、配布資料やしおり掲載内容が減り、紙の使用量も抑えられ、またしおりもコンパクトなものになり、持ち運びも楽であった。

聖霊降臨後第13主日（特定16） 祭色：緑

（聖書日課）伝道祈祷

特祷 諸祈祷 「宣教のため」

旧約聖書 イザヤ書 61：1～3

使徒書 エフェソの信徒への手紙 3：1～12

福音書 マタイによる福音書 28：16～20

♪聖歌

入堂 : 308さんびするよろこびと

昇階 : 358かみのみこみさかえと

平和の挨拶 : 562キリストのへいわ

奉献 : 512みつかいのたたえうたよ

陪餐(奏楽のみ) : 483かみのくにとかみのぎを

退堂 : 476くらやみゆくときには



【奉仕者】

・司 式	越山 哲也司祭 (大会チャプレン)
・説 教	加藤 博道主教 (東北教区主教)
・補 式 (デイトンパート)	吉野 暁生執事
・旧約聖書朗読	軽部 恵
・使徒書朗読	石黒カナ
・福音書朗読	岩佐 直人司祭
・代 禱	眞子義人、キム・ヒェヒ、斉藤晃、高田真樹子、北野恵
・グループ代禱	A. 瀬戸匠 B. 安村大樹 C. 柳原優子 D. 大町はいり E. 大町出 F. 大町包 G. 渡部拓 H. 山本祐希 I. 川村有理紗、法師濱慶子
・奉 献	田中慧、イ・ジンシル、イ・グァンソン
・派遣の唱和	イ・チャンヒ司祭
・聖皿 1	小林 聡司祭
・聖杯 1	キム・ソンヒ司祭
・聖皿 2	矢萩 新一司祭
・聖杯 2	林 和弘司祭
・クロスベアラー	渡部 拓聖職候補生
・サーバー	平岡 康弘聖職候補生、北澤 洋聖職候補生
・奏 楽	関澤美育、法師濱慶子、入江あかね 柳原智子、沼原類、赤坂恵矢



8/26（日）聖餐式 説教要旨

説教者 ヨハネ 加藤 博道主教

3月11日の東日本大震災以来、ボランティアにすぐに関わった人もいれば、自分が行っても何もできないのではないかと思い、いつしか日々の生活にそのこと自体が埋没し、やましさを覚える人々がいるのではないか。

日本全体としても、誰も“何かをしなければ”という思いを持ち続けていたように思える。仙台において、これまで、たくさんの方々を受け入れてきた。正直なところ、最初の頃は、もっと多くのボランティアを受け入れるべきではないかとプレッシャーもあった。

実際、海外より、200人のボランティア受け入れ要請もあった。しかし、仮に200人のボランティアの人が奥の細道と呼ばれる東北のこの地に来て、食事や、宿、全体のコーディネートをどのように施すことができようかと、大人数の方々には待つて頂くことになった。国や各自治体も、自己完結できるボランティアが求められていることを訴えていた。

このような状況に、閉鎖的ではないか、対応能力がないのではないかと批判めいた言葉も出てきた。

阪神淡路大震災のときは、近くに大都市があり、ボランティアは皆、被災地域の近くまで、電車で通った。

しかし大災害イコール、大人数のボランティアが必要と定式化しないほうが良いように思う。

今回の震災では、地元の方々の働きがとても大きかったと思う。コンビニエンスストアはチェーンの力を活かして、食料を供出し、ヤマト運輸は宅急便として地元の土地勘をフルに活かして、物資を細かい地域へ運んでいた。また、地元の中学生達は、小さいこどもたちの面倒をよく見ていた。

今回の青年大会では“やましき”という言葉をよく耳にした。この“やましき”とは良心からきている焦りや苛立ちであり、人として健全な状況と言える。何度も被災地へ行く事が勲章になることも、また、まだ一回も被災地へ行ってないことが踏み絵になることもない。

ナザレのイエスは、神の子、どんなことでも成せる人と周りから思われていました。町々や村々で病気の人を癒しましたが、しかし、イエスさまが癒せたのは、それほど多くの人々ではなかったのではないだろうか。

私は、聖書に書かれていた受難物語が逆であったらどうだっただろうかと思う。イエスさまが掛けられた十字架から降りて、自分の力を示す。

しかし、それは、悪魔の誘惑と一緒に考える。

“神の子ならば、十字架から降りてみせろ”

力を示せば信じる。全ての富みがあれば解決する。

しかし、イエスさまは、全能の力を示されず、黙って破れていかれた。エリートではない少数の弟子達。わずかな人を癒した。

イエスさまは、宗教者としては、その活動は限定的であり失敗であった。十字架は愚かさで敗北のしるしであった。

神さまは、イエスという人格的な出会いを通して、私達に信仰と希望を与えて下さった。パウロは十字架の愚かさを語る。イエスを十字架につけてしまったやましさを仲間と連帯する。

Communionとは、キリストの命を生きることであり、Anglican Communion、聖公会とはキリストにある命の交わりのことを言う。死者との連帯、天の全会衆とともに、多く傷ついた東北の地で、普段は目に見えないCommunionであるが、きょうは皆が集まり、目に見える形でのCommunionとなっている。

大きな希望だ。

【代 禱】

大会最終日8月23日（日）の聖餐式で以下の祈りが捧げられました。これは大会を通じて参加者が感じたことをグループに分かれて祈りを考えました。

震災で生き残り、これからもこの地で生活し続ける人たちのために祈ります。
主よ、逝去者のことを忘れずこれからも生きていく被災地・全世界の人々を、その傍らに立ってお支え下さい。（安村 大樹）

・絶望の淵に立たされた人々に主が光を照らされたように、今もなお絶望の中、暗闇の中にさまよう人々にも救いの手を差し伸べてください。また、この4日間に私たちが見聞きし、感じたことを思い起こさせてください。
そして、この経験と共に私たちが生きていけるように見守って下さい。（河村有里紗）

神様今ある命、今生きている人々が幸せに過ごすことができますように。一人一人の思いや、悲しみ、痛みに寄り添うために、神様、あなたが私たちを用いて下さいますように。そしてこれら、東日本大震災で起こったことを忘れず、いつかみんなが笑顔になれる時が来るように。被災された方も、そうでない方も全ての人をお導き下さい。」（渡部拓）

・私たちは感じ経験したことを語り伝えていきたいという光を与えられました。
その光を暗闇のあるところ(ことに震災のできごとの風化しつつある所、関心のない人々)に灯すことができますように。復興支援に従事している全ての人々の働きの上に神様の豊かな導きがありますように。この場に集められた私たちが、目で見、聞き、感じた全てのことを自らの心に留め、祈り続けることができますように。（大町はいり）

ゆうき・すべての人々を照らし続ける神よ、ここに集うまでのあなたのお導きに感謝いたします。この大会に集い、また出会った一人ひとりの心の中に平安が与えられますように。ことに怖い思いをした人々の心を私たちが包み込み、その人の本当の気持ちに思い至ることが出来ますように。私たちがそれぞれ訪れた場所で見えたこと、聞いたこと、感じたことを、他の人たちとも分かち合えますように。思い続けられますように。覚え続けられますように、考え続けられますようにみ光を持って、これから先もこの場所をてらし、私たちを導いてください。（山本祐希）

今ここに、多くの人と共に集い、考えることができることに感謝します。わたしたちがここで経験したことを忘れず、自分たちの普段の生活の中で伝えていくことができるようにお支えください。また、部分だけでなく全体の復興が成し遂げられる日まで、できることをしながら、多くの人々と“いっしょに歩き”続けることができるようにお導きくださ

い。(瀬戸 匠)

被災地に新たな光が灯りますように、被災者の人たちに笑顔が増えますように、被災者の方々が一日でも早く平穏な日常を取り戻せますように、子どもたちが外で元気に以前のように遊べますように、私たちが震災のことを忘れずいつまでもこのことが風化されませんように、被災地を巡って感じたこと、思ったことを自分の帰る場所に持ち帰り多くの人に伝えられますように、今回の青年大会で出会えた人とのつながりがこれからも続きこの輪がさらに広がっていきますように。(大町包)

家族や友人を失った人々のため。

また、その痛み、苦しみの中から立ち上がり、大切なものを伝えていくために働いておられる人々のため。

私たちはその人々から新たな力をいただきました。

私たちも又、共に歩み、共に生きていくことができますように。

原発に頼らないエネルギーの自給自足、ワクワクプラン、ワクワクアクション、略してワクシヨンの働きのために共に祈りましょう。(大町 出)

この青年大会の出会いの中で、私たちが見て、聞いて、語り、感じた一つひとつの尊い命、悲しみや苦しみ、見えにくくなってきたかつての日常、今の生活を支え合っているいろいろな人たち、間違った情報やごまかし、負い目ややましき、言葉にならない思いや葛藤…これらの上に神様のひかりをわたしたちが灯し続けていくことができますように。(柳原優子)

参加者名簿

	名前	
	主教 加藤博道	東北教区
	講師 川上直哉	日本基督教団牧師
	川上恵	
	川上灯	
	川上奏	
	司祭 越山健蔵	
	池住圭	いっしょに歩こう！
	齋藤孝司	被災地巡りガイド
	遠藤諒子	被災地巡りガイド
	佐藤文敬	被災地巡りガイド
	三宅信一	被災地巡りガイド
	中曾渉	被災地巡りガイド
	藤田誠	聖公会出版

◆北海道教区

	名前	教会
1	大町出	札幌キリスト教会
2	大町包	札幌聖マーガレット教会
3	熊野威	新札幌聖ニコラス教会
4	斉藤晃	旭川聖マルコ教会
5	鈴木照洋	秋田聖救主教会
6	高橋愛	小樽聖公会
7	高木泉	深川聖三一教会
8	執事 吉野暁生	北見聖ヤコブ教会

◆東北教区

	名前	教会
9	赤坂恵矢	仙台基督教会
10	赤坂聖矢	仙台基督教会
11	赤坂唯	仙台基督教会
12	司祭 イ・チャンヒ	聖ペテロ伝道所

13	影山敬信	仙台聖フランシス教会
14	加藤彩子	仙台基督教会
15	司祭 越山哲也	若松諸聖徒教会
16	林嘉奈子	仙台基督教会
17	法師濱慶子	仙台基督教会
18	聖職候補生 渡部拓	ウイリアムス神学館
19	関澤美育	仙台基督教会
20	伊藤みのり	秋田聖救主教会

◆北関東教区

	名前	教会
21	大山洋平	大宮聖愛教会
22	司祭 木村直樹	大宮聖愛教会
23	木村佳樹	大宮聖愛教会
24	橋本和磨	大宮聖愛教会
25	聖職候補生 平岡康弘	小山聖ミカエル教会

◆東京教区

	名前	教会
26	下条あすか	浅草聖ヨハネ教会
27	下条のゆり	浅草聖ヨハネ教会
28	鈴木みのり	聖アンデレ教会
29	田中慧	聖マーガレット教会
30	新田紗世	浅草聖ヨハネ教会
31	沼原類	聖アンデレ教会
32	安村大樹	聖マーガレット教会
33	大町はいり	聖パトリック教会

◆横浜教区

	名前	教会
34	聖職候補生 北澤洋	ウイリアムス神学館
35	入江あかね	山手聖公会

◆中部教区

	名前	教会
36	司祭 キム・ソンヒ	松本聖十字教会

37	佐野智香	松本聖十字教会
38	司祭 野村潔	名古屋聖マルコ教会
39	松村希	長野聖救主教会
40	村松未希	長野聖救主教会
41	山田拓路	可児伝道所

◆京都教区

	名前	教会
42	岩本翔太	京都聖マリア教会
43	大隅百恵子	京都聖ヨハネ教会
44	北野恵	金沢聖ヨハネ教会
45	司祭 小林聡	福井聖三一教会
46	司祭 矢萩新一	金沢聖ヨハネ教会
47	山本祐希	上野聖ヨハネ教会
48	高田真樹子	奈良キリスト教会
49	山田雪	京都聖ヨハネ教会
50	瀬戸匠	京都復活教会
51	軽部恵	金沢聖ヨハネ教会
52	大隅彩恵子	京都聖ヨハネ教会
53	北岡珠紀	笠田キリスト教会
54	柳原智子	京都聖三一教会
55	柳原優子	京都聖三一教会

◆大阪教区

	名前	教会
56	浅海由里恵	聖ガブリエル教会
57	石黒カナ	庄内キリスト教会
58	尾崎華	尼崎聖ステパノ教会
59	小西宏平	高槻聖マリヤ教会
60	執事 千松清美	西宮聖ペテロ教会
61	眞子義人	大阪聖三一教会

◆神戸教区

	名前	教会
62	河村有里紗	神戸昇天教会

63	司祭 林和広	「倉敷聖クリストファー教会」伝道所
64	八代良寛	垂水伝道所
65	山本風太	呉信愛教会

◆九州教区

	名前	教会
66	早川成	久留米聖公教会
67	山本尚生	久留米聖公教会

◆沖縄教区

	名前	教会
68	司祭 岩佐直人	島袋諸聖徒教会
69	岩佐怜子	島袋諸聖徒教会

◆大韓聖公会 大田（テジョン）教区

	名前	教会
70	イ・グァンソン	ムクバン教会
71	イ・ジンシル	ムクバン教会
72	イ・ヨンジク	ジョンウップ教会
73	キム・ヒェヒ	ジョンウップ教会
74	司祭 ジャン・ドンユン	ジョンウップ教会

日本聖公会全国青年大会2012（仙台）収支報告

2011年1月1日から2012年12月31日まで

【支出の部】		決算額
		円
1	実行委員会費	802,097
	下見費用	4,720
	会議費、旅費交通費、	797,377
2	プログラム費	417,390
	プログラム費	231,000
	傷害保険料	16,100
	燃料・通行料	31,414
	講師謝礼 8件	90,000
	雑費	48,876
3	事務通信費	68,542
	案内文・しおりの印刷代、送料、	
4	宿泊費・会場費	2,420,025
	秋保グランドホテル／宿泊、食事、会議室、送迎バス、	
5	参加者交通費補助	450,000
20	支出合計	円 4,158,054

【収入の部】		決算額
		円
31	参加費収入	2,009,500
32	プログラム参加費収入	10,000
33	寄付金収入	10,000
34	その他収入	0
35	青年活動のための資金より受入	2,128,554
50	収入合計	円 4,158,054

日本聖公会

全国青年大会 2012 in 東北 報告書

編集 日本聖公会全国青年大会 2012 実行委員会

日本聖公会 青年委員会

発行日 2014年11月

印刷 日本聖公会 管区事務所 (400部)

